

平和・憲法から原発・オスプレイ問題へ

箕口 一哲

はじめに

今年の日本は東日本大震災の影響もあり、「不安定なままの民主党政権」「好転しない日本経済」。「尖閣諸島と竹島問題」に代表される周辺諸国との軋轢。米軍基地再編問題に関わり浮上した「オスプレイ配備問題」。そして戦後六七年を迎え、時間とともに「風化していく戦争体験」。静まったままの、「憲法論議」という状況にあった。

今年も、今一度「憲法と平和の意義」を考えていく分科会となった。昨年同様の、(一) 教育現場、地域と協力してどのような実践をつくっていけるのか。(二) 戦争の真実を学び、真理と平和を希求する人間を育成する実践はどうあるべきか。という柱を立て、実践発表と論議を繰り広げた。

この「平和・憲法」分散会は、久しく参加者が少なく停滞気味であったが、昨年レポート数七本、参加者は十五名となり

復活のきざしが見え始めた。今年は、六本のレポート報告が行われた。

今回取り上げられたのは、憲法教育に関わるものが一本、平和学習に関わるものが二本、原発問題に関わるものが一本、沖縄基地問題に関わるものが一本、総合的なものが一本、計六本である。ここでは、議論の概要を述べることにする。

一 「憲法」教育への取り組み

余市紅志高校の国語科教諭斉藤圭二(敬称略)、「憲法学習を身近な者に 小説『憲法が教えてくれたこと その女子高生の日々が輝きだした訳』を活用した現代文授業実践」と題した憲法教育の実践を報告した。市販されている弁護士伊藤真の著書、小説『憲法が教えてくれたこと その女子高生の日々が輝きだした訳』の全文を授業の中で読み切るというものである。手法は、授業の中で生徒と一緒に音読し、最後に感想文を書くというシンプルなものである。

斉藤は「これまで、命、平和、人権と尊さを学んできた。見学旅行での平和学習も実践してきた。今回は憲法人権学習を身近なものにしたいという思いから始めた」と、その思いを述べた。

授業実践の教材となったのは小説「憲法が教えてくれたこと」とその女子高生の日々が輝きだした理由」

は身近な問題を取り上げ、実際に高校生が登場する内容に構成されている。内容も、自由権・社会権・生存権・人身の自由と冤罪・地方自治・民主主義と立憲主義の単元に分かれ、全体で一七〇ページである。これを一四時間かけ、断言ごとに生徒は感想文を書いていく。そして最終の感想文につなげていったという。

音読で進む授業は、当初ほとんど声が出なかった生徒も、月日が経つにつれて声が大きくなっていったという。生徒はこの学習を通じて憲法は人を「縛る」ものではなく、我々を守ってくれるものと気づいていく。「生徒は光を放つものに気づき、それに向かって生徒は伸びていくもの」と、斉藤は気づいていく。取り組みのちに、斉藤は著者に感想文を送っている。大変優れた教材として広めてほしいというのが斉藤は言う。

二 「平和学習」に関わる取り組み

奈井江商業高等学校地歴公民科野上鉄哉(敬称略)は、「ヒロシマ ナガサキ ビキニの授業」と題したレポートを発表した。これは見学旅行での「平和学習」の実践を、まとめたものである。

野上は二〇〇八年度入学生には担任として、二〇一〇年度入学生と二〇一一年度入学生には教科担任として、「広島・神戸・大阪・東京」への見学旅行に取り組んでいるが、特徴なのは丁寧で緻密な「事前学習」にある。

ドラマ「はだしのゲン」や映画「ヒロシマナガサキ」(監督ステイブンオカザキ)を視聴し、音楽「Inori 祈り」(クミコ)を活用していくが、ヒロシマを原点とする戦争はもちろん、「核兵器」の問題から第五福竜丸事件(実際に第五福竜丸記念館を訪問)へと繋げていく。

この「核兵器と核戦争」に関しては、「世界終末時計」や「ゴジラ」を切り口にして導入に入っていく手法は見事である。第五福竜丸事件については、「マグロ塚」や「久保山愛吉記念碑」なども紹介している。また、地元と繋げる工夫として、奈井江町にある「厳島神社」を取り上げているのが特徴である。

今年度の見学旅行は「ヒロシマ」を訪問せず、「第五福竜丸」と「東京大空襲」への取り組みが中心となる。これらについての来年時の報告が楽しみである。

帯広農業高等学校地歴公民科の藁口一哲は、長期にわたる見学旅行にかかわる「平和学習を」継続してきた。「人間とはなんだ、平和とはなんだ」という問題を生徒たちに突きつけてきたが、「あまり欲張らず」、いつか子どもの心から芽が出れば

よいという「種まき作業」ととらえている。

養口は同時にこれまで、地元の戦争体験者を通じその体験を「追体験」する形で、太平洋地域や東アジア諸国にあるその「現地」などを訪問してきた。そのルポ内容を学校現場や地域で「発信」し、「戦争」の「悲惨さ・無意味さ」を伝える活動をしてきた。しかし近年戦争体験者の高齢化などによって、その活動の見直しが求められるようになってきた。

そこで近年焦点を当ててようになったのが、「民族紛争」「内戦」などの現在世界で進行している問題である。昨年二〇一一年夏中国新疆ウイグル自治区を訪問し、ウイグル族の民族問題に直面した。二〇一二年一月はインドシナ半島のカンボジア・ラオス・ベトナムを周り、カンボジアの内戦やベトナム戦争・ベトナムにおける日本軍の食糧調達二〇〇万人餓死に関わるルポを実施した。二〇一二年八月は、中央アジア四カ国を周り、主にウズベキスタン・キルギスの民族問題などに触れることができた。

学校現場での「授業」だけでなく、「報告会」「地元紙」「ウェブサイト」などで、より多くの人々に世界の現実や「平和の尊さ」を改めて知ってもらう活動を続けている。

養口は、キーワードを「発信すること。発信しつづけること」と、考えている。戦争体験者の高齢化による減少と現在は静まっている「憲法論議」のため、今年は脚光を浴びる機会は

多くない。

しかしこの秋、石原東京都知事が知事辞職後新党結成を表明している。これについて中国韓国の近隣諸国は、「極右政党が誕生し平和憲法へ挑戦することは必至」と、とらえている。

こうした動きが起これば、来年は私たちの「有り難くない」活動の出番となる。またこれと同時に自民党の新総裁にかつて「美しい日本」づくりを進めた安倍晋三が返り咲き、石原新党と連携して「憲法改正」を声高におおれば、尖閣諸島・竹島問題で大きくこじれた日中・日韓の關係に、更に大きな影響を与えることになるであろうと危惧している。

三 「原発」問題にかかわる取り組み

現在高退協の高橋直巳(敬称略)、昨年在職していた小樽商業高等学校定時制での取り組みを「原発を授業で取り上げて」という名のレポートで報告した。体育科教員だった高橋は、退職直前に一発奮起 保健の授業で、現在国内最大の問題となっている「原発」問題を取り上げた。

「環境と健康」という單元の中で五時間を使用し、授業実践を展開した。高橋自身、東北被災地で「復旧ボランティア」を経験している。宮城県石巻では墓地の泥の排泄、岩手県大槌町で

は牡蠣の養殖のための漁協での作業に参加してきた。その経験は、この授業実践に大きな説得力を持たせたことは疑いない。

授業は、一時間目は「原発の仕組み」について。二時間目は「日本の原発」について展開していく。ここでは、日本地図に原発の位置をマークしてみる。生徒の反応は、「こんなにたくさんあるんだ」「小樽の近くの泊村にもあるんだ」などである。何のためにあるのかという疑問に行き当たると。当初は、「工業の発展のため」「戦争のため」「コストが安いため」であるが、「大企業に魅力的な仕事」などと進んでいく。三時間目は、「日本は地震大国なの」。生徒は「日本はこんなに地震地帯なのに、こんなにたくさんさんの原発がある」ことに気がつき、「なぜ」という疑問に行き当たると。「戦争のためか」「海があり冷却しやすいから」という論議が展開していく。

四時間目と五時間目は、いよいよ本題の「放射能汚染と放射線障害について」の授業となる。チェルノブイリから福島の記事などを取り上げている。

八八年一二月、泊原発にかかわる直接請求による条例案が簡単に道議会で却下された。高橋は、これにかかわる「九〇万人署名」にも取り組んでいる。「こんなにも簡単に否決される」のかと、落胆したという。

高橋は、今回の取り組みについては「生徒に美味しそうなえさを撒いて、授業に誘導している感じ」と謙遜し、更に「細

々でも以前からやっておけばよかったと今後悔している」と感想を述べているが、生徒たちの感想文を拝見すると、感動があまりに残る授業になっていることが充分に伺えた。

四 「オキナワ」と「オスプレイ配備」問題への取り組み

中富良野町立本幸小学校太田和真(敬称略)は、今年大きな問題に発展した、沖縄への「オスプレイ配備」問題を取り上げた。今年も沖縄は、揺れていた。普天間基地問題からこのオスプレイ問題、そして近日の連続して発生した米兵の県民への暴力事件である。

太田はまず、「自分はどこに立つのか、どの位置に立つのかをしっかりと示して行かなければならない」と述べたあと、二〇一二年九月九日沖縄県宜野湾市で開催された「オスプレイ配備に反対する沖縄県民大会」に参加した内容を報告した。この県民大会には、約一〇万人が参加している。会場までは、各自治体がバスを準備し、復路は有料だが往路は無料という。県内のバス会社が、バスを県民に提供した形という。

太田はこの県民大会に対して、「自分が住んでいる地域」をどう考えるか「故郷を子どもたちにどう伝えるか」という、これまでの彼自身のテーマに照らし合わせている。

大会前日、太田は現地沖縄県民との交流会と学習会に参加し

ている。そこで知ったことは、戦後沖縄で起こった米軍機墜落事故の実態である。戦後五〇〇件以上の米軍機事故があり、もっとも大きなものは五九年に発生した「宮森小学校墜落事故」であることを知る。これは一八名の死者と二〇〇名を超える負傷者を出した、大惨事である。また、普天間基地が地元宜野湾市にもたらす影響についても学んだが、もっとも印象的だったのは「九五年少女暴行事件に抗議する県民集会を経て、沖縄の平和教育が変化していった」と言うことであつた。それまでの

「平和教育」は沖縄戦などの戦時中の体験が中心だったものが、これを機に「米軍基地問題」へと比重が移つていったことだといふ。

快晴の大会当日は、数多くの大集会を経験しているためか混乱もなく人々が集合できたが、欠席した仲井真知事にたいしては、大きなブーイングあつた。またこの大会に参加し、沖縄県民の多くが「米軍基地はしかたないとしても、これ以上の負担は許せない」という立場にいる事がよく分かつたという。

地元北海道に帰つた太田は、「戦争の悲惨さだけを伝える平和教育だけでは、今の日本の平和を考えるには足りない。またオスプレイの配備によって具体的に命が脅かされる沖縄と違い、北海道の子どもたちにとって時間的・距離的に遠い事実と、自分たちの今の暮らしや近い将来のあり方のような目の前の生活との間には、大きな隙間がある。それを埋めていく平和学習

が、米軍や自衛隊に対する賛否に関わらず、必要なのではないでしょうか」と結んだ。

この太田報告に関連した内容として、北海道平和委員会の坂森浩(敬称略)から報告が寄せられた。

オスプレイ問題や連続した米兵事件により、日米地位協定の更なる見直しが現在求められていること、日本にも海兵隊を作ろうという動きがあることなどが報告された。また、現地域での平和運動はどうなっているなどの論議が展開された。

最後に高退協の菊池俊造(敬称略)が、「平和・憲法の現在」と題した、レポートが発表された。実践報告ではないが、現在の「平和と憲法」の問題をうまく総まとめにしたものであり、今回の分科会を締めくくりに相応しい内容であつた。

菊池が今年気になつているものは、「復興予算の流用問題」「福島の子どもたちの甲状腺異常」「原発の再稼働・新增設」、そして「オスプレイの沖縄配備」であつた。

菊池は、「平和を語り安心して暮らせる世界をつくるための教育実践は、過去の戦争体験を今に伝えることだけではない。原発とオスプレイを巡る現実の動きに、平和と憲法の現在が凝縮されている。それを見つけ出し、掘り出し、その意味することを伝えていくこともまた困難であるが、私たちの大切な仕事

である」と結論づけた。まさにこの分科会の総まとめに相応しいものであった。

五 「平和と憲法の分科会」としてのまとめ

「戦争体験」は年月ごとに確実に風化していく。しかしこれらは、細々でも発信し続ける必要があるであろう。戦争体験者も減っていく。沖縄ではすでに始まっているが、次の若い世代が語り部になる取り組みが求められている。見学旅行での平和学習は、「心のへの種まき作業」として重要である。現在でも多くの学校が実践を続けていることに、私たちは少しだけ胸をなで下ろした。

「憲法」に関しては、来年必ず石原新党と安倍晋三の自民党が「平和憲法」へ挑戦してくると予想できる。「原発問題」も、長期にわたって展開されていくことになるであろう。確かに原発とオスプレイ問題に平和と憲法の現在が示されている。

オキナワが再度クローズアップされている。県民の「沖縄だけが変わらない。沖縄は差別されている」という発言を多く耳にする。これら沖縄の諸問題も、学び続けていかなければならない。沖縄と私たちの北海道をどう結びつけていくかも、私たちの課題である。